重修真書太閤記

五編 九

459
49

へ13特
門書
號 459
巻 49

福井

重修真書太閤記五篇巻之廿五

有岡落城荒木妻子誅戮の事

并三木釜山落城の事

羽柴筑前守秀吉播州平田の陣ふ有て別所勢と合戦數度ゑ及ぶとも筑前守いゐも切勝けるふよりの別所方ゑ次第ふ勢減して力ゑ微し寄手ゑ日々ふ馳集うゑ氣よをそ猛うゑける中にと大村の合戦ふ勝利と得て三木乃兵士多く戦没し毛利の加勢過半散亂飯國し兵粮多く掠奪をらゑしゑ釜山の城内大ふ衰弱し剰糧乏しく士卒飢餓ふ及へふ

同攻會印

ことを筑前守推量し別所の滅亡遠からず弥城兵の氣勢を摧かんやと思ひしらゐ付城仕寄と段々と繰よせを南は八幡山西は平田北は長屋東は大塚おいくさう何ようを五町許の間に押詰たり其構の嚴重なることまつ塀の高さ一丈余よりして二重に築上その中に石を入搔楯井楼を高く組上その前に逆茂木を引く柵に結加古川の底に亂杭を打橋の上に大番をとをく往來の人を立切てあとを改め後に諸軍勢の陣小屋を拵あらべ辻々に城戸を開夜も篝火たくさまなる夜廻り嚴重沙汰したりまゝ筑前守の近習の士三百人を六組に分役所

に當番書を記さをその組頭に判形を居させ少々と懈怠せぬ守をけるとい三木へ諸方の味方より内證の往來打絶て籠に養ふる鳥の雲井に翔ふ翼を慕ひ圏に羸とし獣の野山を縱る蹄を思ふ如く何處ようのもの遁れ路の有とやをんと朝暮心を苦めあされてゝそ居たりける然に攝州伊丹在陣の城よりも去八月廿二日の夜攝津守村重を尼崎に落その跡に荒木久左衛門以下の家老とも堅固に籠城して有けるに十月五日瀧川左近將監一益智略を以て城中にありける中西新八郎宮脇平四郎と云者と期を中西よりして足輕大

将里野左衛門尉脇山加賀守同源大夫と語らひけ
ふゑ里野脇山等一命を惜しまず忽ち志を
變じ寄手ふ一味し同十五日の夜瀧川ろ人数と上
藺塚へ引入けり上藺塚より進て町口を乗取やか
て火と掛しうゐ城下の町々一時の炮と立上り今
ゐ城の構のうち成ふにり城中まことふ難義かろ
ら少時い保つとも兵粮い乏しく敵ゐ近々と進
たり籠城うあふ屋うゝにと心々ふ見えけるを
信長いつしゐ知食使者と以て仰遣ちさしけるゐ
早く村重と諫め尼崎花隈の両城を明ちさは當
城ふあふ妻子の一命らる助くへ若まち両城と

ゐたさとさらんふい急ふ攻めめ火と放ち一時ふ
責殺をへし両條のうち急度返答あるへしと仰遣
ちさとしうゐ荒木久左衛門尉其外家老とも是ふ
従ひ十一月廿四日在岡より尼崎ふ至り村重ふ信
長の使者演説しける趣といちんとふしけるふ村
重くやくも其意とさとと久左衛門と入さうゐをハ
詮方ふくいつとと伊丹ふ帰りけるふ有岡ゐ織
田七兵衛尉信澄入替りて久左衛門尉以下を入を
久左衛門尉後悔をとも其甲斐ふく何處と指て
當もふけとと足ふよりをく立退けり織田殿村重
ふ御旨ふ応して尼崎花隈両城と獻をさるとと怒

らを給ひ有岡よあり川る男女一千餘人を捕へ村重ゝ妻と始め宗徒の者共の妻子とは京都よ於て
これと誅ちらをとその餘い悉く伊丹よ於て磔よせしもありまさを一處よ集置柴を積て是を焚殺さをとしゝゝ其喚叫ふ聲よにもかゝるゝゝ是と見つる輩廿日三十日の際いその俤眼前とちかをさつらゝ
とあり秀吉播州よありて此由を聞て大よ悲歎ゝ信長の御計ひなりと大よ歎息なりたりあを
一書ふ瀧川の戈覺よて中西宮脇とをゝ十月十五日の夜夾刻上膳塚へ敵と引入十一月廿四日家老共退城を然ともを村重同心をゝ因て家

老共剃髪染衣の姿となり高野粉川の奥よ入と云信長荒木ゝ妻子と虜ゝ十二月十四日帰京あり て三条河原よ於て佐々木内蔵助前田又左衛門尉金森五郎八不破河内守原彦次郎と奉行と ゝて弟吹田の某同妹野村丹後守妻村重ゝ娘荒木隼人ゝ妻其妹一人村重ゝ妻等一門男女百廿餘人と誅をらをとゝゝ有様見るゝの袖とゝゝらぬを無りけりとをを織田家譜よゝ十月伊丹城兵妻子百廿人尼崎七本松よ磔をとありて十二月村重の妻子と捕へ洛中と引廻ゝてをらをとを斬とあり又一書ふ吹田七郎村氏廿歳天正七年十二

月十六日害野村の妻十七隼人妻十五懐妊村重
妻出産廿一娘十三吹田の妻十六荒木志摩嫡子
渡邊四郎廿一伊丹安大夫妻世五同子松千代八
歳北河原與作妻十七荒木與兵衛妻十八池田和
泉守妻廿八荒木越中守妻十三牧左兵衛尉の妻
十五伯々下部某五十六荒木久左衛門子自然十
四とも見ゆ

その年とい川の暮て天正八年の春ゆもなきと
三木の城中兵粮よ詰う士卒等の雑炊の料も絶し
か共志ち馬と殺してもとと食ひあとして命
とい保ちつとともも力弱う弓と引んとも甲斐あく

なくしてうち只今敵めくたらい誰うめく防くへ
きやと安き心もふうとけう秀吉此体を推量し然
ち一責をめて見んとて馬廻うの兵士ゆ下知して
正月六日八幡山の要害と責て一瞬の間ゆこれと
攻落しまゆ諸勢と近々と押付たとい釜山と筑前
守の陣とくつうゆ二町ちゆうゆあるうはけや八幡山
よ上ゆべ三木の城中眼下ゆみえて兵粮の盡し体
まゆ必定と知ゆたとい同十一日城の南構の方よ
人数と付山下と放火さを別所彦之進う籠うたる
鷹尾の要害と攻たてけるゆ城兵心ちゆうゆ武け
ゆとと今いくゆ五六日兵糧の絶し處ゆとい鎧をも

くて思ふやと働さうとや思ひろん何や素肌
まて切て出敵に向ふて切死に死ぬと氣勢ハさ
をう勇めとも手足の働合期をに堀の下に倒ふ
し自害とあをとの多うしうい彦之進友之這々
釜山へ引て入秀吉いよ〳〵力を得進んて別所山城
守ら籠り〳〵新城へ責入けるあ是もおなし〳〵一戦
ちめ〳〵敷をに山城守賀棟釜山へ引入て城へ即
落ふけうめ〳〵とし〳〵のちい三木の本丸ちうにあ
うつとい本丸の兵粮も忽喰盡し〳〵城中以の外に
困窮とし〳〵ふら見請〳〵わとに筑前守使者と遣りて
斯の如く大勢にて取詰たとい今い遁とぬ時宜と

あるにたり其上に備前美作の宇喜多直家織田家
に降参〳〵とい路次ふさうて毛利勢の出陣か
あひめ〳〵さく後詰の頼絶てたり此上ハまとに當
家と頼まををそんとあらい秀吉ひうふも〳〵て安
土の首尾と取計ひ申へし然ふうら是迫籠城度々
花々敷軍〳〵て弓矢の名譽と四方ふたうく揚給ひ
しとのう今さら忌々しく降参をらとんも永さ武
勇の瑕あるへくとあ左もあるまし去とて無益に
士卒と飢餓せしめぬひて何とうせさをあ〳〵つさ
又運盡て國を滅し家と斷〳〵ゆとの異國本朝に何
程もあとありて珍〳〵とをにさんとも其最期の行

跡の好悪ニ因て譽とも取又恥辱ニもあらハ長治
さる名家累代の大将なり末代ニ英名とあと傳え
たくハるゝ能々御思案あるべきふくハ敵とあり
味方となるゝ此世間の習ひとハ宿習遇
の縁ニよるとハいへゝ又疎意を存をへきにあらハ
是秀吉ハ實意ニハと申遣ハ小三郎長治
同彦之進友之一所ニ會合ー評定ニ成ふ様秀吉
の申ハさとし条々道理至極ハ敵ハ情あり
我等ハ今の身ニ取て實ニ哀の中の悦ひ何様
此のハ堪ふるとも運を開やんたのこもふ毛利
の音信をてニ絶て兵粮ハ盡たれハ打出く快く

軍とをくさ力もなく此まゝに日を過さハ徒ニ餓
死をんと歎さの中のふけさ彩ハ秀吉の申越たる
趣ハ我々早く自害をゝとの事あるべ但此項迫
付まとひたる侍ともハ如何ふのゝく助たゝ然
ハ我々ハ大将ハ腹を切さあひ侍士卒の
命と助ハ様返答して然るべいさや山城守賀棟
ふ申て使者と返し自殺の用意ニ及ふべと申け
れハ友之莞尓と打笑ひ流石別所の大将軍ニてま
しまのハ實ニよろゝく仰られたり某ハと
を左ハと存しハひハとも思召を計りかゝて今
迫黙止ハ也城州事ハ御返辞の後仰られハ方可然

最初より仰らるゝ異議を申て事決〳〵申はゞと申されけるゆへ長治悦ひとゝ御邊ハ能書あり認ゆへと有〳〵により友之ゆ〳〵こまつ〳〵ちゝと書とろう判と居る山城守出来うろうろ此ことを告げるよ聊不得心の体あり〳〵つとも若年といひ家嫡たる長治とよひ友之とてゝ決着を〳〵と否むつさうあ〳〵孫いろふ〳〵よ判形〳〵宇野右衛門佐を使と〳〵て浅野彌兵衛尉の方へと遣ら〳〵けるその文ふ唯今申人候意趣者去々年已來敵對之事真雖非無其故今更不能述素意此併時節到來天運所極何足噛臍哉今所願者長治吉親友之三人來十七日申刻可切腹候然者士卒雑人等者無科可被刎首之段不便之題目也於加憐愍者被助一命吾等今生之悦來世之樂何事加之哉此旨宜被披露者也恐々謹言

天正八年正月十五日　　従五位下別所友之
　　従五位上別所吉親
　　従四位下侍従別所長治

浅野彌兵衛尉殿　参

長政この書状と讀終り涙を流し使者宇野右衛門佐と伴ひ秀吉の本陣ゑ至りて委細ゑ披露ぞ〳〵

ゝ秀吉まゝそゝろう哀とを催ふ〳〵士卒の丸をあ
それゝ三人切腹しそらとて代らんとの意趣承く
う届けゝ即返書ゝ添く柳甘荷有種々城中へ遣く
にゝさ由長政ゝ下知ありゝゝゝ長政ゝとを取揃
て秀吉の返書と共ゝ宇野ゝとゝ〳〵けりその状ゝ
書札到来令披見候今度従籠城之始至於今日毎
度之合戦無一而不當利城中雖失勝利是又非可
謂智之拙然今因運命難遁来十七日申刻長治友
之吉親被到自害所残之士卒雑人被助申之由真
以大将愛士之仁去義去前代未聞也可謂良将之
器矣因感其心中予亦落涙難止右三人於自殺在
之者軍卒等赦免之事少相違有間敷候猶従浅野
彌兵衛尉方可申達候恐々謹言

羽柴筑前守
秀吉

別所小三郎殿
別所彦之進殿
別所山城守殿 御返報

別所兄弟ゝの返報と得く大ゝ悦ひ秀吉の心中を
感ずけり

別所長治兄弟自害の事
并秀吉築姫路城事

天正八年正月十七日別所小三郎長治廿三歳同彦之進友之廿一歳同山城守吉親三人諸士の命ゐ代う自害そべしとてまつ諸士を呼出し今日まて籠城艱難の處聊以忠義心と變とゝ功勞謝そる處を知とゝと云て金銀武具馬具あまた取出し心々ゐ是と配分さを秀吉より送り來る酒肴を開て暇乞とゐしそのうち奥ゑ入しうゐ山城守の妻時刻迫付ゝ御先と仕るへしとてまつ幼少の男子二人女子一人あうけると差殺しその刀ゐく胸と貫さて伏ゐくゐ長治の室家三歳の男子と差殺し直ゑ自害せらるとける友之の妻ゐ懐妊あうしうゐ是も後と

しと直ゑ咽を貫さて伏ゆゑうして申刻ゐもあうしゐつゐ長治友之城州をまちけるゐ出來らゝ急き御入あると催促しけるとゝ吉親心替うしてとて叶くゐのゐのゐらゝ城ゐ火と掛切て出戦死そへし何士卒と助けて大将くゐ死そへゐんゆと云長治大ゐ怒う此期ゑ及ひ約束と變そべゐんや比怯至極の叔父の振舞や妻子ゐけゐけゑ早死したると知てやとそしけと申遣しけるとも猶不得心の体ゐると吉親の郎等あうゐ憎しとやおりひけん天守ゐ上る處と打果し首と長治の前ゑ持參しけれゐ長治いしうも計らひしと云聲の下ゑう腹十

文字ふうさ切い三宅肥前守治忠及錯しけうその
のち友之も同しく腹と切るを治忠これを及錯
し我身も共ふ自害して失ふろう抑此三ケ年の籠
城多くの侍と失ひ民の愁と顧ふに終ふその家國
と亡しけること全く山城守の偏執の事起う如斯
ふ至ることあり嗚呼憂世の變態今ふてしめぬとて
もあり翌十八日城中の者共と出られ城を枚原
伯耆守ふ預らせしと也又三人の首とを安土ふ送
う實検ふ備へけるふ信長大ふ感賞ありてそもく
ふ恩賞と賜たうしとめや秀吉三木の城ふ入て國
中の仕置と取扱ひけるふ但馬備前美作等ふ秀

吉の麾下とあり威勢四國九州まても加ろうしわとう
居城の地便あしくていよろしめくふて小寺官兵
衛孝高ふ國中の繪圖と作らきこれと見るふ三木を
要害ふけるとも國の偏境すして政務を取行ひ軍用
と支度とるもとくく不自由なるくし姫路ハ國の正中ふ
して四方へ自由の境あるくその上要害よろしく海上
の便利と得たり武威繁昌の勝地ありとて姫路ふ新
城と築き四國九州まてその御手遣めつとと然るくハ
と勸めけるとい秀吉同心ありて今迫の城を破却し
自身縄を張小寺孝高淺野長政を奉行として普
請と急うを三木ふうて移う住と又浮田直家を

織田家に従ふてこうのち作州伯州にて毛利と屢合戦あ〜くうとも さゝせる軍功もあ〜筑前守の手前をうけて居たりけるに播州平均の悦ひと申とそ中國進發の法定を請申けるに秀吉はまた事多く〜てその時日と定めはまつ児嶋に一城を築き然るへ〜と下知ありけるに直家帰國し児嶋の初濱といふ処に一城を築き直家の弟七郎兵衛忠家養子與太郎基家と大将とし〜戸川肥後守足立太郎右衛門尉池田八右衛門尉浮田修理等三千餘人と籠置兵粮玉薬十分に納て堅固に是と守らをけり

一書に蜂濱とあり普請の時に浅野彌兵衛警固船二百艘相添着下さるといふ〜

重修真書太閤記五篇巻之廿五 終

重修真書太閤記五編巻之廿六

備前國初濱合戰の事 并筑前守奇兵退敵事

浮田和泉守直家秀吉の差圖に因て領國備前兒嶋の蜂濱に城を築き浮田與太郎基家同七郎兵衛忠家戸川肥後守秀安等と籠置守らをけるに小早川隆景此由を聞近隣に付城を構へ押の兵を差置て〜と蜂濱より四十町ばかり隔て〜麥飯山に砦を築き隆景の舎弟穂井田伊豫守元清を大将として有地美作守古志清右衛門尉村上八郎左衛門尉福井

孫六左衛門尉植木出雲守同下總守同孫左衛門尉
津々加賀守三千餘人ゆく堅固ゆ守う候へとの事
あらけまとも此輩まつ麥飯山ゆ來うて砦の普請と
初めけるゆ蜂濱ゆある浮田う手の者敵方の城塚
いまゝ全く成就せさるうちゆ押寄其普請と妨く
へゝとて逆勢の輩三百騎彼處へ押寄足輕とめけ
て戰らゝめんとゆ毛利勢もうゆく覺悟の所るれ
ら敵の寄るとゆ見く此方ゆうも打て出追崩とて五
百騎らうう馳出て宮の森といふ処ゆて雙方行合
とるもち打物鞘をらつゝ戰ひける但元うう大將
の下知ゆあらゆ敵も味方と若者とものの血氣ゆて

やるあまうのとるれら進退の號令とても定まら
ゆ心々の集う勢毛利浮田の両家ゆく凡千人近さ
勢ふゝて突合切合追ゆまくとう何とをいつとと
ゆさうゆたれゝ勝負も元ゆう定めらゆ蜂濱の
城中ゆてい味方の若者ゆ宮の森ゆて毛利勢と行
合て軍をるとや早く馳行引上ゆて五六百の勢
ゆて打出たうん毛利方ゆても味方の者共蜂濱の勢
と出合たらんゆ必定合戰とるゆらん大將のゆる
しもなくて私ゆ軍をゆ後勘又難儀るう長者衆え
や走行制しを加えゝるやと云ゆゝ七八百人うゆと
ゆて打て出る宇喜多方の侍大將戸川肥後守若者

共の行跡穩しからぬ罷向てうかゝと馬に鞭ち
せけるとて戸川打をて知と顔をる者やある我劣し
と馳出る毛利方にてもまゝ打出雙方の勢三千あ
まり海と山との堺まて入替戰ふわとる大合戰と
そ成よける戸川何わとわをうても血氣さうんの
壯者ら勢猛く打合たるとい制をるとても聞もあて
弥ゝけ〳〵戰ひけると戸川も今い詮方なく然ら打
破りて追散しその間に手早く引返をと味方とて
もあ火花と散して戰ふさう毛利方にても穗井田
伊豫守元清麥飯山うう是と見て先手の者と討を
てい両川ゝも一門衆に何と面の合さるへきそ

我に續けの共とて自身鎗を取てもせ出しける
あそ村上八郎左衛門尉有地美作守とゝゝも真先
に進て馳出横鎗にふて突立とい浮田勢色めき
立て見へける処へ戸川ゝ行心元ふゝとて浮田
與太郎基家ゝ〳〵來りけるゆ味方負色と見るや
いふ鎧のくふを踏そらし鎗を取て突立〳〵戰ふ
宇喜多勢ふとと見てまゝ立直し突うゝとゝ毛利
勢の中ゝう村上八郎左衛門尉有地美作守古志清
左衛門尉等何も勇猛の古兵ふとい我身の大事と
面もふらぬ粉骨して働けい惣軍ゝれと手本とな
り潮の湧如く押ゝうたとされゝ蜂濱勢まゝ突

崩さと亂れ立を與太郎基家大ゐ怒り云甲斐ゐさ
めの共の軍ふくゆ斯ゐそ突めのゐと兎こそ働ら
けやと只一騎毛利勢の中へ切て入四方八面ゐ突
立切立たゝめゝゐそ敵も多く討をけうその上馬
物具の美麗ゐるゝと敵大将と見てけれゝ四方ゐゝ
取込討んとゝ基家勇猛絶倫たゝゝゝゝ秋の野め
をゐゐゝゐる薄ゐ似さる鎗の穂をめのゝめそ
とゝおめゝゝゝそ飛鳥ふんとの如ゐ振舞名を敵
多く亡されゝと憤ゝゝふゝゝゝ打んと寄合けをい
基家ゐゝゝ勢と得て前後左右切廻るいとゝゝゝ
ゝゝ太刀風ゐ近ゐるゝ人もゐゝゝけれゝ誰ゐゝゐ

ゝれゝん毛利勢の中ゝゝゝ鉄炮を以て窺ひをゝゝ胸
板と打移しゝゝゝ鞍ゐゝゝゝゝ真逆様ゐとゐと
落落ゐと敵兵ゝと寄て終ゐ首を取ゝけゝ蜂濱
勢ハ力をとゝゝ毛利勢いさを立けゝと見て戸
川肥後守ゐゝ口惜大将を打て何面目ゐ生てゐ
らん敵を破らゝい切死ゐ死やとて只一騎取てめ
えをい蜂濱勢大将とゝいひ戸川とゝいむ何も餘所ゐ
見ゝゝさや返をゝゝゝゝ喚き叫ひ真圓ゐゝゝて突
ゝゝゝゝその勢のゝひゝさを物ゐゝそゝたとゐ
をい輪寶の山と崩ともめゝやらん勇ゝゝゝゝ
毛利勢此競ゐつさ立らゝと四度路ゐゝて見へけ

るゝと村上右地横合へ突かゝる此よゐやまされ宇喜多勢又ずけ色よゐゝ処へ羽柴筑前守ゝ蜂濱ゝつゝさの為よとて浅野彌兵衛長政よ三千餘人と差添兵船数十艘よて帆をける勢今日蜂濱の沖よ着やいなこの合戰の体を見てけゝい長政下知ゝて船を濱邊へ漕ゝを〳〵と切てめゝつけゝい毛利勢あゝひもゝゝぬ処ていあゝ右往左右よ亂を立けるゝと穂井田伊豫守元清軍い今日よあゝさゝよゝ早々弓揚ゝと下知ゝて麥飯山へ馳還けるゝと備前勢追打よをんとゝやゝゝゝとも敵のたゝゝぬゝとさのゝ競ふとめゝとていつゝとも蜂濱へ引返ゝ浅野の加勢ゐゝらゝゝゝゝゝ蜂濱勢い一人ものこさゝゝうちとるゝゝゝゝゝものゝとて穂井田元清口惜ゝゝとゝもその甲斐ゐゝされとも今日の軍毛利勢十分の勝利ゐれい一書ゐゝて隆景へ注進ゐゝけるよ隆景思慮ゝけるい味方の砦いゝゝぐ成就をゝゝ敵ゐい羽柴勢加勢とゝてゝを加てるのみゐゝゝゝ與太郎基家と討ゝゝ怨ふゝゝるゝゝ猶豫ゝたゝゝい敵いゐゝ強へゝ先んてる時い人を制せといへゝう急き蜂濱へ押寄一時責よ責取へゝとて隆景二万餘騎よて寄らゝけゝ隆景めゝる軍よ馳たれい先手前とい堅ゝゝて負ゝゝゝき用意とゐゝ

後陣い勁く戰ひと持へ〳〵とぞ支度をう蜂濱ふて
ゐる此間ふさのの多〳〵討死ー又い手と負以の外ふ
無勢ゐる上斯手早く寄へ〳〵といおめひもるるに
敵い目ふあゐる二万餘騎雲霞の如くの大軍ゐう
淺野勢と合をても寄手ふ比をれゐ数ゐるに戸川
肥後守岡山へ加勢と請い直家も我身一手てうな
ち〳〵と播州へ注進ー加勢と請たうけう秀吉聞も
あえひ直ふ打立へ〳〵いをめへとも此頃攝州石山
の本願寺顯如上人信長と和平とてのひ石山と退
き紀州鷺の森へ退散あう〳〵うとも嫡子教如上人
石山ふ残うゐひけるい二度合戰ふ及をんとを〳〵

と京都ふうの御羌圖止とを得を教如上人みをや
うゐう退城ゐ〳〵へとも門徒ゐを織田殿を恨を
一揆と發をへき催〳〵あうと聞えて畿内静うゐう
をされとも数年來心ゐめらをゐひ〳〵本願寺石山を
退去あうてさ〳〵當る敵のゐさとや悦をせゐひけ
んあるひを天下平均の功大形成就をーと思召け
れもえるや舊臣暱近の面々の聊不快ゐう〳〵事ふ
因て改易ぜられるとさゐう〳〵物狂ひの如くぞ
あうけるそもい誰々ぞ佐久間右衛門尉信盛同
男甚九郎林佐渡守安藤伊賀守等也いつもをさ〳〵
ゆ〳〵ての罪ゐけとも或い十年前の事あるひ

ら廿年も前の事を思ひ出し其罪を糺さるゝ処と
のや是ゝ於て諸臣等恐怖の色を顯ら誰ら身ゝ
やゝるへきと安き心のあらさま秀吉も備前へ
差向へき勢もゝ如何をへきとおもひ〳〵のともも
救て叶そぬ處あう一計を以て敵を驚うさてや
とユ夫ゝしゆるゝ寄手い小早川一手ゝるゝ
の隆景い智謀あうて慎ふうき本性なれゝ奇兵を
以て追散をへ〳〵と思案〳〵まつ陣觸をいと嚴重ゝ
ゝ〳〵たうけうその次弟をこ〳〵に何日ゝ備前へ加
勢と〳〵て打立へきそ諸卒末々やゝて用意を〳〵先鋒
五千人い数百艘の船ゝ取のう餝摩坂越の津々ゝ

う出船〳〵水嶋灘を鞆へや寄ん音頭の瀬門を漕廻
ゝ廣嶋へ直ゝ向をん〳〵といふ沙汰もあう是い小早
川の後を切んとの謀るうその大將ゝ誰々そ蜂須
賀彦右衛門尉正勝同小六家政宮部善祥坊等を先
と〳〵て昨日も今日も追々ゝ出立〳〵うゝあふとび
たゝ〳〵の軍勢やうゝ毎日〳〵打立い先鋒五千
人といへともまこゝ幾万人う播磨の國の侍ゝ
大形一人ものこ〳〵とゝられを取々語ういきけ
ゝい往ゝ還るゝ旅人の宿を出る噂ゝも備前加勢
の出立い幾日〳〵くゝゝゝられを軍兵三万餘人
と聞つるゝ誠ゝる七万餘人安土の援も加へれる

よや淀川筋い陸と船とよ引分て姫路とさして下ふの書夜いそひ馳るまて結句常の往來い道のかゝへよ透めらは餉やしるしたるもあるといそそれるやゝ中國筋へも聞觸し隆景の斥候ともこのことを聞とそのまゝ注進とまゝ輝元元春の方へも聞えしらる案の如く羽柴筑前守い流水の平原と蕩てよ似て手廣ふる軍とこのこその上よ電光よ雷鳴のひゝきの從ふこゝ逸駿と戦とむ祝ととる大將ふう人のをてよ姫路を立しゝと知よろゝとゝよ敵地へ入込てをや夫々よ手配うるをいゝんや勢い七万餘人といへるたしうよ三四万

らあるらうん後とたゝをてる隆景いうよ猛しゝとも終よ敗軍よ及ふゝ秀吉の旗を見てのち引退きたゝゝ臆病とやらいるもるなるゝ先手の勢さゝまる見へぬわとよ此陣をゝ引揚て敵よ間とぬうをゝゝと大將をてよ引色よなれる士卒い猶更恐怖氣をき當時無雙の弓取と東西うけゝ鬼神の様よ沙汰をある羽柴筑前守う寄來らい一人も生て帰らをゝとゝ二の足ふんてあやふめる兒鳴う沖の斥候の者追々注進ふしけるる数百艘の兵船よいろゝの見るをぬ印を立りるる必定羽柴の先鋒とおゝえい漕つをゝ引もゝゝ水嶋灘へ

とゝ〳〵ついこれゝ直ゝ羽柴勢ゝてゝいそゝて定めて
鞆ゝ廣嶋へ着て當御勢の後を斷ゝと覺ゝ御用心
あるべゝと告さゝけゝ隆景いゝよゝく油断ゝなく海上
と見をゝむきゝ何さまあゝさの兵船ゝ播磨灘ゝ
ゝ漕ゝてゝるゝのゝとゝ幾日とゝゝふゝとゝく西とさゝて
騁ゝとゝゝつゝとも〳〵注進し藝州ゝゝも海上ゝゝく
らゝとゝそのゝゝきゝぬゝと船ゝ碇をさゝ下ゝ後陣の
勢をゝつゝと見ゝて〳〵侯是ゝ定めて羽柴筑
前守ゝ備前加勢のそのゝめゝ下を先鋒の船ゝゝ
め御用意ゝゝて然ゝゝと告ゝゝゝ隆景ゝもゝく
あゝゝゝて士卒を纏め麥飯山へゝゝのゝゝゝで

ゝゝて防ゝゝゝと思ゝゝゝゝゝと藝州ゝゝ頻ゝ
軍を班ゝゝゝへと使者ゝゝ波を打て告來ゝゝゝ
麥飯山ゝゝたゝゝ得を安藝國ゝて引返ゝゝゝ
於て蜂須賀宮部の人々も播州さゝて引返ゝけを
ゝ筑前守されゝゝひゝゝとて手を拍笑をゝゝ
ゝゝ〳〵

一書ゝ與太郎基家をゝちゝ〳〵穂井田元清の若
黨水川某ゝゝとも或ゝ瀬尾十太郎ゝゝと云又
ゝ基家のゝさゝゝ處ゝて戰死をゝゝ蜂屋宗十
郎とゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
信長舊臣等改易の事

并羽柴筑前守因州働さの事

蜂濱の寄手退去ぜしうゑ筑前守出陣ふ及ちたふ
とふふして警固の為ふさしを下をし淺野彌兵衛を
も呼返し小寺官兵衛尉孝高淺野彌兵衛尉二人を
姫路ふのこし置數百人の郎從大形引卒し安土ふ
參上し西國筋の容子委細ふ言上をしうゑ織田殿
ふきうに感悦ふしまひ長々の軍陣といひ一國平
均ふ治めしのこふふ備前の浮田伯州の南条ト
鴨等ふて幕下ふ皈伏ふさしめさること比類ふさ働
きと称美ふしまひしうゑ筑前守い面目を施し御
前の首尾一段の仕合ふて織田殿いうゑも御機

嫌ふろしかうけるふふ佐久間安藤林等御勘當
ふうし由殊ふ佐久間といい累代の重臣といひ老輩
なり御弱齢ふて御家督のうしめうゑ今日まで數
ヶ年の御奉公を以て御宿免ふう然るへしと言上
をしうゑ織田殿それをそ筑前守ふ存をぬ処ふふ
いふのみても見ふ佐久間天王寺ふ在番ぜしこと既
ふ五年ふおゑふ然るふ一度も敵を調畧をしことふ
し我宗門といふを以て顯如を顛倒をし故ふうい
不忠の至といふへしの又石山の堅固ふると恐
ふてふうい武道ふ疎きうさるいい臆病の二いふ
るへしその外ふ先年朝倉義景を追討のとき諸士

の武者振あしけさい咎めさせるひしゝゝ何も赤面して迷惑うゝ信盛一人迷惑とも存そゝ結句自賛をゝと上を憚うゝ不敬の極と申へゝ味方原の軍ふゝるゝと加勢ふ下うしゝのゝ手を塞くわとの働きもそゝ剰平手監物を捨殺ふゝて辻のわうゝ段遠州の諸家の前ふて面目を失ふと云へし組の侍即等の内ふてもせめて心をせあうて討死をるゝ深手を負う為たゝいせめて手柄と云へさに恙ゝ帰うゝい臆病者と云へゝ此体の信盛ふといい小さい罪科いうもゝゝらまゝ家老譜代の者ふうとて宿さい政事の妨ふらん次ふ林佐渡守去弘治

年中の事ふう信長う若年ふるとふて弟の美作守ふ一味して謀叛を企ゝ事老臣ふ似合さる不義ふう不忠ふう然共大敵ふふあうゝ時ふれい國中ふう逆臣を出をとを好ゝせむえゝゝのまゝに許されゝ也それうのち格別ふ後悔して過を改め忠義をとけむへさふさはふてゝいつも人ふう跡ふ立て一際をくゝ稼もそゝ人ふるけふ所領たゝれふさやうふる侍を何うをん一命を助け追放をゝ憐愍の厚さをのふへゝ安藤伊賀守先年武田信玄ふ内通ゝ野心を企てそのゝち兎角信長へ不足のいうをあゝそゝ嚴重の軍令をゆるめをゝふをゝと大河内責まさい越前軍小谷軍の時度々あうゝい人も知るとそうゝたゝゝ是いその方も知たる美濃侍ふれいはふとふ近さのの

也何の容赦も及ぶまじと此頃八國あまた切從へ大名多く旗の手あひく中に古きの罪科いそのまゝにゆゑ置新參のものゝ多つる誤りといふと咎むるに信長依怙ありといふれんと口惜らん〳〵死いのちをひや筑前守と仰られしら秀吉もふさゝひいと詞の〳〵古き罪科と紀さるとい我身の上あるやらんおそらき殿の御心中やと古をふまて退出て敵國亡ひて謀臣亡ひ飛鳥盡て良弓藏むと竹中ら遺言とゞのおそれて共に安き居らさき我君やとおのこぬものゝふらひけうそれも筑前守い播州へ引返し因州と討平げんと工夫みいとまあらひけう

流布本此条に秀吉佐久間とあらん段全本に從て次巻まで因州合戰のと文同

重修真書太閤記五編卷之廿六終

重修真書太閤記五編卷之廿七

秀吉訪佐久間因州陣の事 并 山名降參家老逆心の事

羽柴筑前守秀吉い播州へ下向の次佐久間右衛門尉信盛ら紀州高野山の麓ある相卿の閑居地へ舍弟小市郎秀長を使として黄金を贈ら衣類を調えその不如意を訪ひけるゆゑ信盛さそうらゝ〳〵筑前守むら〳〵をおもちく信盛ら今の体を快とおもて顧もをへうを親〳〵さ一門中あるひ恩むら〳〵恩を施〳〵たるものさそうゆ多ゆら〳〵一

人とゝてその詫をまひと訪のもふ〜信盛う意
みたよむ〜ゆるとも有し嘸ふ秀吉い怨こゆらんと
思ひ〜ふとい秀吉う心中よを幾許う悪〜とおの
つるたゝんよ今日の御使ろそよふも嬉〜く存候
とて厚く秀長よ禮とふ〜ととふ〜信盛よにあう
し時い秀長ふとよ手を下へきといゆけくもおも
くゆ事ふうき
信盛天王寺と去とき黄金二枚を懐ゆ〜て父子
下部一人を召具し高野山へ上うその〜ち相郷
の民家よ入ゆ〜熊野浦よ住〜とも云紀州名所
圖會よ委〜然るよ大和國吉野郡十津川庄武藏

村光明寺よ信盛の墓ふう天正十四年七月十二
日卒とゆゝ
是年八月下旬筑前守因幡國を切從へんと一万五
千餘騎ゆて但馬國へ出張と當國の守護出石の城
主山名右衛門尉祐豊入道宗詮い此五月よう秀吉
の旗下たう〜ゝろふれを先手とふ〜て因州へ發
向ふきとやと其軍配を評定ひ
山名祐豊い誠豊の子ふう誠豊い彈正少弼政豊
の二男彈正少弼致豊の弟ふう政豊い宗全入道
の孫なう政豊の子中務大輔豊定因州鳥取の城
主たう豊定の嫡子中務大輔豊國い祐豊の堦ふ

う祐豊此年五月廿一日七十歳にて卒家督は
德石丸氏政のち右衛門佐尭凞といふ
因幡國は宗詮入道う塔ありける大藏大輔豊國代
代守護として鳥取の城に住を一族あれも宗詮に
う織田家へ降參と勸めさとひるに豊國は毛利家
旗下にて人質を藝州へ出し置し故心迷ふて思案
定まらぬ家老の森下出羽守中村對馬守かとはい
ども最愛の子供を同じく毛利家へ出し置しうい
主人と諫めて毛利一味變をへらぬと志を堅くふ
して籠城なしたうひきい然い押寄蹴りふせと下
知なしける鳥取の城は要害にて力攻にをて味

方若干滅ふ〳〵奇計を廻し是を取んと種々にて
めうけるに當國鹿野の城に毛利家にう三吉三郎
左衛門尉進藤豊後守を大將とし森脇内藏允久
之佐々木善兵衛忠守以下千餘人にて揩籠り山名
う人質をふ此城中に置ける由を聞出し即鹿野へ
押寄これを攻山名う人質をさへ渡しふい其餘は
一人も傷ひ〳〵へうぬ然るを違背をい四方にう
放火して城中をふ殺にをへ〳〵と申送うにふう
三吉進藤う輩さる勇士あれとも秀吉の威勢に恐
れ〳〵と見へ豊國の人質及ひ家老等う人質一人も
殘さず筑前守へ渡しをうは神妙の至とて圍を解

是より於て三吉進藤い蘇生〜つる心地〜て皆藝州へ引退く筑前守い此人質と召具〜て鳥取の城へ向ひ鹿野城ゑゝ元の如く鹿野某と置亀井新十郎とさ〜添さう

亀井新十郎茲矩初い湯新十郎永禄元年雲州ゑ生る父い湯三郎左衛門永綱祖父い湯信濃守惟宗佐々木五郎義清十代湯與五郎政通七代の孫ゑ〜天正八年い廿三歳ゑう鹿野い氣多郡鳥取ゑゝ邑美郡この間ゑ八上郡とゑゝ行程三里許山名の人質筑前守の手へ入〜ゑい時日とうつさひ鳥取城へ押寄取圍ゑ關を作う矢軍少々ゑ〜

後筑前守使者と城中へ贈う申けるゑゝ山名い將軍家御相伴衆とて崇敬淺うゑさる名家なるゑ毛利幕下とゑて何や先祖と鹿〜ゑそや織田殿い將軍と輔佐〜朝廷貴ひ四海静謐の大功と立ゑゑん と本意とゑ〜ゑ早く毛利一味の志と變〜朝廷の勅定と奉〜天下泰平の時と待て本領安堵〜累代の美名と傳へらるとゑ家ゑ對〜て忠臣と云へ〜若又毛利一味の好と棄ゑ〜おのひゑそ〜只今城ゑ火と掛燒拂ひ人質の息女とそ〜め妻く是と殺そ〜といそをけと い豊國兼て鹿野落城のことと聞て人質の安否と案

〜煩ひ居ける処あるよ使者人質のとく〜秀吉の
手よある由を告〜うるゝ忽ち心變〜て早く筑前守
へ降參せとやとおのひけるよ家老森下中村ゝ輩
毛利家〜〜別よ賜ゝ領知あるい秀吉よ降參
のゝち此領知を取上らるゝことをうふ〜こゝろうど
も人質を奪ゝれ〜よ仰天〜その上神變不測の秀
吉いうゝある計とやゝ〜〜いらんいつとよも先御降
參然るへ〜と勧め〜ゝい豊國をゝゝち筑前守へ
降參〜けるよ〜秀吉ゝ計ひよて元の如く鳥取
の城主とゝ〜置聽て信長へ申て因州守護とゝ〜
よい〜をへ〜息女のとい諸人の疑を散〜申へき

為あれい鹿野よよつさ〜置ていへといゝを亀井
新十郎よその儘預け置をゝへうとゝ〜ゝる内よ
雪の頃よもゝ〜〜うゝ北方の働不便利ゝ〜とて
筑前守但州へ引返〜直よ播州姫路よ凱陣ゝ〜た
うけ〜然るよ山名の家老とも當座の難をのゝと
ん為よ降參を〜〜とあれい筑前守播州へ引返ゝを
否豊國とゝ〜めて再度毛利へ使を遣ゝ〜此程一
且の難儀を遁ゝをいゝんため秀吉へ申通〜ていへ
とも誠よへいゝてゝ去事ひへきゝゝ〜然るへき
大将一人御上をいへ當國よ残り留ゝい秀吉の勢
とも残らひ打取可申いと是い豊國と森下中村ゝ

といふものの共悔りて家老共の心の儘に計らひ
あり毛利この由を聞て吉川元春より牛尾太藏左
衛門尉春重といふ大剛の勇士を上をんと云豊國
にの由を聞て大に驚き秀吉と約束せ〜を今更違
變あるまゝさうとて家老等を取鎮めんかとの力
もあ〜めゝて い終に毛利家のためを失てれんら
又い家老等うたがるいうちう憂目に遇んをうめ
と臆病神をさそそれく近習者一両人を召具しひ
そうに城中をぬけ出しるくと姫路へ走着筑前
守へ云々の由を注進しけるに秀吉ちれを聞て
しめうさもあるべしと思ひたうよりく不日に

誅戮をくへく豊國いたの処にあるべしとて姫路に
あゝまひ置因州へ脚力をたゝせて處々にさゝ置し
勢共い礒部と鹿野へ集り堅固に守るへき由下知
と傳ふさて又鳥取の城中にてら豊國退去あり
ことを悦ひ早々毛利家より大将を差越給たりいへ
と催促度々に及しかとも牛尾大藏左衛門尉春重
五百餘騎にて鳥取の城に入森下中村伊田等逆心
の徒勇をうちひしをやく國中の敵を追散さしや
と用意しけるか秀吉の残し置さる人数をく
礒部鹿野の両城につかをけるにを去い鹿野城を
責んとて寄さうとも此城に面々の子供等

と人質より出せ〳〵と入置たれハ心とくれく嚴〳〵く
も攻立得ぞ礒部と一時責より落〳〵るゝ當城へ自然
開城さハ有〳〵んその上まて人質とる無事より取返
そともあるへ〳〵とて礒部へ押寄攻けるゝ城中より
ても能軍〳〵て寄手あり〳〵責あくそけるゝ大將牛
尾春重真先より進んて責〳〵けるゝ城〳〵射る
矢より膝の節を射させ直ぐ鏃と拔さ〳〵うとも折
て殘ア〳〵やしたゝけん痛そふそ〳〵〳〵て足立ハ
寄手いられるゝ力と落〳〵手と盡〳〵けとも弥痛の
強けるとハ森下中村丈抱〳〵て本陣へ引返〳〵療治油
斷あ〳〵なく〳〵かとも存命不定より見へ〳〵〳〵本國

へ引取て養生ハ因て元春〳〵市川雅樂頭を代り
と〳〵て少時の在番より遣〳〵跡〳〵然るへ〳〵大將
と差越んとの約束也森下中村重孫て鹿野へ押寄
人質と無事より渡されあ〳〵城兵恙なく送り帰さへ
〳〵と再三申入〳〵うゝ亀井新十郎寄手の使より答ふ
ふ様人質の事姫路へ申遣〳〵然〳〵てのち渡〳〵可申
飛脚の往來ゝとの暇たゝまゝるへ〳〵とヤけふゝ
〳〵森下中村丈の事とてゝられをゆるゝとその〳〵
ち亀井礒部の味方と示合をまつ城より籠る千餘人
の内百餘人と城外より出〳〵左右より鉄炮多くとり持
せ伏勢とふ〳〵さて礒部の味方八百餘人くるゝ打て出

鹿野の道筋路の左右に埋伏させ人質の内豊國の息女ちゝを助置そのゝ森下中村伊田等をそゝのかし廿餘人の人質を悉く首を刎死骸を城門の内に打つけてかけなゝへその〳〵ち鳥取へ使を遣し姫路へ申遣ひ処人質御渡し可申との事なれば明日皆御渡し申へし但我々ら立退へき道々の關を御引をひへし〳〵と申遣しけるに森下中村最さもある〳〵然れば明日受取へしとて廿餘人の人々の郎徒士卒を迎に出立を路次の關をは開て番兵みな引取たり鬼角そるうちに城中より人質の乗物を順々にとゝさ出しその跡より二百餘人の兵士城を

出て迎の士卒に森下中村伊田殿の人質受取るふへし〳〵と云にとり面々の主人の子息なれば久々敵陣にありてさこそ心勞なるべしひろん早く鳥取へ帰ぜらるゝ日頃の鬱を晴らし給へやと云〳〵乗物の戸を引て見るにいつれも首級のこゝにして骸なし〳〵あまりのことに驚き歎く有様目もあてられぬ次第なり迎の者の歎を相圖に左右の伏兵一度に起り立鉄炮数百挺たちまちに打掛けるに鳥取方一支もさらえに周章ふためき散亂しけるに森下中村あまりに無念なるひしらに備を立て戰ひんと五六丁引退き味方の兵士を集めんとか

ける處へ礒邊の城兵八百餘人おめおめけぬ
道の傍より俄に鉄炮を射出し畑の下より切て懸
り面もふらぬ戰ふゝ森下中村肝を消し爰にも
伏勢ありと騒きたち森下も中村も立足もなく敗
走し亀井新十郎十分に勝利を得つゝとさの〳〵長
追をへくらべと下知し手勢を集め鹿野の城を引
拂ひ姫路へあそび帰りけゝ森下中村城門を入て
見れば首なき骸をくつけふ〳〵掛ふ〳〵へその
傍に相傳の主君を叛く八逆の罪人の子供なる
とゝて如斯ふをのの也と筆ふゝる記をし紙旗を
立置さうしゝを何とも思愛の痛に堪ず泣哀〳〵各

の罪といひのゝしり憎き奴原の所為うゝとゝれを
怨〳〵死骸と首とを継合と鳥取へおそ帰りけゝ
一書に秀吉鳥取に向ひ山口森下中村用瀬伊田
田井庄等の人質を磔木に昇せ久松の麓に掛ふ
らく鎗を付て降るや否と問に山口以下更に耳
にも聞入を因て秀吉盡くゝれを殺さしむその
のち秀吉豊國の息女を磔にせんとゝ豊國哀て
秀吉に降るといふ山名譜に天正六年五月秀
吉鳥取を圍ゝれを降をとあり豊國三十一歳
の時といふ然るに家老森下出羽入道道與中村
大炊豊國に叛く故を以て豊國鳥取久松の城に

任せることあるべし八月廿一日毛利浄意入道一人を召具し姫路へ上り秀吉へ云々を訴へらるとのへう

吉川經家鳥取籠城の事

并羽柴秀吉遠計の事

亀井新十郎茲矩い森下出羽入道道與中村對馬守と欺き人質をころし敵を追散し豊國の息女を伴ひ姫路へ來う鹿野礒邉の次弟を注進しけるい秀吉大へ悦ひされそのいと其方を置るなれいしく也為たるものゝなると大へ褒賞あるてのちゆの息女とい豊國へ渡しけるへ豊國悦喜うそうあく我

子の一命秀吉の仁心へ因て助うゝして厚く筑前守と徳とゝあるべしと謝しけるい秀吉へ因州の様子を聞へ牛尾い矢疵へ依て雲州へ引返し跡へいまゝ大将來着をいされとも鳥取い名城へ力攻へゝあるべしいたし時をそへ嚴寒へ近し北地の合戦へゝあるべしゝゝ明年の春こそ然るべけるとて出陣の義とい止められそのゝち秀吉奇計を案し出し大船数十艘を仕立士卒を商人へ出立を数多の金銀を提て若狭へゝ因州へそへ米麥大豆その外何へ寄せ兵粮とゝあるべゝものゝを買をけるへその價日頃へ倍して求めさせけるへゝ百姓等い

いふよ及こゝに森下中村山口ゟ革も謀とい夢ゟも
〜らゝ當座の慾ゟ迷ひ軍用金の手當ゟせんと号
し兵粮とも半過出し金ゟうへ〳〵悦ひけるゝを愚
あと冬こゝろ春迫の間ゟ買取〳〵船ゟ積入勇こゝゟい
さんてうへうけるは是秀吉の謀ゟて敵の兵粮を竭
さん為と知をたゝ然して年もくれ天正九年の春
ゟもあゝらい森下中村ゟ訴ゟよつゝ吉川駿河
守元春因州へ大将を遣こさんためゟ其器を撰て
をけるゟ吉川式部少輔經家然るゝ〳〵とて森脇若
狭守春定松岡安左衛門春佳山縣筑後守春勝朝枝
加賀守祐好井下新兵衛武永四郎兵衛井尻又右衛

門高助左衛門長和三郎左衛門長岡信濃守野田左
衛門尉大草因幡守等八百餘騎雑兵ゟけて二百餘
人をさし添今年二月廿六日藝州を打立て因州鳥
取久松の城ゟ入い市川雅樂頭い藝州へ引返し森
下中村大ゟ勇こたち國中の兵士五千餘人百姓郷
民等男女七千餘人ゟて籠城こ秀吉此由を聞付ま
つ伯州の南條元續小鴨元清等うのとへ密使を走
らせ此節隨分手稠く毛利家の持城へ取掛乱妨を
〳〵事難儀ゟ及こゝ〳〵早々加勢を遣こゝ〳〵と申
遣る依て南條小鴨等國中へ〳〵ち出放火濫妨ゟ及
ふゝ〳〵往来の商客旅人ふとゟ秀吉六万餘騎ゟて

姫路を發し伯州へ攻入毛利の附城ともを落しそ
もそう直ゝ雲州へ攻入つゝ支度をゐしける由を
知せしかゝ毛利家ゝ入込し斥候の者ども速ゝ
藝州因州へ注進ひその上ゝ丹後但馬の面々を
語らゝて兵船あまゝ海上ゝうめへの〳〵毛利ゝう
鳥取へ入る〳〵兵粮あらゝかさまゝけゝとを下知し
ける吉川經家鳥取の城ゝ入て總人数を改むるゝ
七千餘人ゝう兵粮を勘計をるゝつゝ三月ゝう
ゝの用ゝ足ひ
七千餘人の兵粮一日九四十石と費をゝ〳〵三ケ
月九十日ゝ三千六百石即今四斗俵八千二百五

十俵ゝ當る
經家大ゝ驚き籠城の要い兵粮ゝるゝくの如く
乏しくして争う軍功を立ることを得へゝんや早く粮
料運送あるへくいと申送の所藝州ゝい斥候ども
走帰う秀吉伯州發向の風聞實正ゝいと注進しける
ゝう經家いゝく心せゝ鳥取ゝう一里許をへゝ
て丸山とゝいゝ処ゝ新城を築き因州侍奈佐日本
之助塩谷周防守高清佐々木三郎左衛門等一千餘
人を籠置吉川家人山縣九左衛門春佳を大將とゝ
したゝう藝州ゝてゝい小早川隆景を南方の詰手とゝ
ゝて定め置ひたれい備前美作ゝて浮田を取合居

たりけるの秀吉出陣の風聞と聞て藝州へ注進に藝州よりも因州の注進に驚き吉川元春に注進に元春より近隣に命じて兵粮と鳥取へ運送をもんとあーける処へ南条小鴨等打て出毛利家の附城とあめまーける故元春伯州へも出陣といあるへうゝ又風聞の如く秀吉鳥取に押えと置雲州へ直に切入い防戦以の外難義たうへ此手當もあさいい叶まーと三方四方に心を配りけるふうう兵粮運送も思ひあうう延引をされとも智謀ちくまー元春ふとい伯州石州の面々に兵粮の事と充られーる枚原播磨守盛重ちめうい神速に

鳥取へ入ーあとも是いそつうに一月ちめうと支ふへーその外の人々の兵粮大船四艘に積入田中宗右衛門豊島源次郎有馬又八郎白井藤次郎同新左衛門同七郎左衛門竹内新五右衛門手嶋藤次郎等是と守護ーて漕ひとうけるを但馬丹後の驚固船に喰留られ兵粮盡奪取とあまつさへ兵粮守護の兵士多く討ひとりて此事播州へ聞えーうち秀吉さゝい不日に進發とへーとて安土へ言上ー六月廿五日中國表出陣と定められぬう吉川小早川古今無雙の名将勇士ふまとも猿面短小の羽柴筑前守に謀られてその智謀と逞そそとあゝに唐士

の諸葛孔明我朝の楠正成それもそうれ日吉丸
は猿冠者たくのなくぬ種ふるへ〜

一書ょ丹後沖ょて兵粮運送の田中宗右衛門豊
島有馬白井藤次郎手嶋藤次郎以上廿五人討死
し竹内白井七郎左衛門切捨て帰り注進ととい
ひ七月五日羽柴秀長丸山の東へ打出物見しけ
るゑ奈佐日本助打出少々矢軍をしゑ七日夕刻
秀吉六万餘騎ょて鳥取丸山の両城ゑ取巻攻ゑ
ふ秀吉の本陣い摩尼帝釈山也南の脇ハ黄丹衣
衆北の脇ハ白母衣衆西表の袋川と千堂川との
間中村孫平次少阿弥山名中務大輔木下備中守

荒木平太夫神子田半左衛門蜂須賀彦右衛門小
寺官兵衛木村隼人佑加藤作内東表い織田殿の
加勢一萬餘騎鳥取と丸山の中間ゑ雁金山ょ
い織田於萬宮部善祥坊宇喜多勢以下八千餘騎
藝州押えい秋里村ょ城ゑ築き松原七郎左衛門
一万餘騎ょて備さう又難邉ょゑ浅野彌兵衛丹
後田邉衆丸山の東口ょゑ羽柴秀長桑山修理増
屋隠岐守添田但馬の山名北い垣屋磯邉泰亀井
武田蓑部とあう

重修真書太閤記五編巻之廿七終